第4章　計画推進のための施策

施策1　本に触れ、言葉・物語・自然等への関心を高める（乳幼児期）

乳幼児とその家庭を対象として、あらゆる子どもが「本が好き」、「読書が楽しい」と思えるよう、地域総がかりで本に触れる機会をつくります。第一には言葉を着実に身につけるとともに、物語を読むことで得られる高揚感や感動等を通して、楽しさや関心を育んでいきます。絵本から始まり児童書へと展開し、図鑑等も活用しながら、周囲の環境に意識を持つように促します。そして社会や自然への関心を高め、言葉でその関心を周囲の大人や友だちに共有することで、知的関心や好奇心を育んでいきます。

■捉えるべきテーマ

〇読み聞かせを行う家庭を増やす。（「家読（うちどく）」）

〇子どもの読書活動の重要性に対する保護者の理解を促す。

〇読むことの困難さの有無にかかわらず、子どもの図書館利用を促す。

■取り組み

①子どもにとって身近な読書環境の充実

区立図書館はもとより、子どもが日々を過ごす幼稚園・保育園、また児童センター等において、乳幼児向けの本を充実させ、子どもにとって身近な読書環境の充実を図ります。

第一には言葉の育みと物語への関心を高めるために絵本を充実させますが、それとともに図鑑、児童書等も充実させることで、一人ひとりの子どもにとっての「適書」に自然と出会えるような蔵書構成とし、読書興味の段階的な展開を助けます[16]。さらに、子ども一人ひとりの読書興味に応じて「適書」を案内できる人材を育成し、人的体制も含めた環境形成に取り組みます。

②家庭での読書活動の推進

家庭での読書活動は基礎であり、また読み聞かせは愛着形成にもつながる大切な取り組みです。そこで、区立図書館や幼稚園・保育園、児童センター等において、子育て世代に向けた意識啓発に取り組みます。読み聞かせの大切さやスキル、本の選び方等にくわえて、読後に親子で感想を話し合うなど、「家読（うちどく）」の取り組みについても周知を図ります。また、保護者向けの情報発信とともに、読書活動の相談に応じる体制についても検討します。

ただし、家庭が十分に取り組めない場合も考慮し、家庭での読書活動を代替するための地域の体制を整えることも同時に取り組みます。

[16] 適書は、個々の読者の能力、性格、嗜好に適した本を言い、社会的に価値が高いとみなされた本である「良書」と対照されるものです。適書は個人の特性に適しているかどうかが基準となります。

③自然や社会等への関心を高める図鑑等の活用

日々の読み聞かせのなかで、子どもの身のまわりの出来事（自然や社会）に関するテーマを取り上げた絵本等を活用することにより、子どもの意識を広く外に向け、自然や社会に対する関心を高めていきます。そして自然との関わりや遊び、屋外活動等の様々な体験も組み合わせることで、実際の物事に触れ、関心をさらに高めます。さらに、その体験を事典・図鑑等によって深く知ることで、知ることの楽しさを感じる機会をつくります。

④あらゆる子どもに対する読書への動機づけ

区立図書館においては、さわる絵本の製作やその他バリアフリー資料の収集を継続して取り組むとともに、読むことに困難さがある子どもに対して周知を図り、利用を促していきます[17]。そのため、バリアフリーおはなし会等、それぞれの困難さに応じた読書機会の提供に取り組んでいきます。

また、視覚障害のある子どもはもとより、言葉の発達が十分ではない子どもが本を楽しみたい、またその保護者も本を楽しませたいと思えるよう、意識啓発を行うとともに、困難さの有無にかかわらず図書館を利用しようと思う環境づくりに取り組んでいきます。

【事　業　例】

○はじめてのえほん よんで よんで事業
○おはなし会（対象別おはなし会）
○手づくり会・おりがみ会
○イクメン読み聞かせ講座
○絵本講座
○読み聞かせ講座
○スタンプラリー
○「家読（うちどく）」の啓発
○読み聞かせボランティアの育成や活用の拡大
○読書ノート
○絵本作家講座
○ぬいぐるみお泊り会[18]
○児童コーナーの設置・充実
○土曜日・日曜日の事業開催
○人形劇の開催、図書館PRと図書等の紹介
○「しながわ親子読書の日」の啓発
○幼児向け図鑑の収集・充実

◇デイジー図書／マルチメディアデイジー図書の更なる活用・周知の充実[19]
◇点字図書、さわる絵本、大活字本を含む拡大図書、LLブック等、各種資料収集の整備・充実[20]
◇来館できない幼児への宅配サービスの強化
◇施設・病院へのアウトリーチサービスの充実
◇発達段階や障害の程度に応じての対面朗読の実施
◇多言語イベントや手話付きおはなし会の充実
◇多言語のおはなし会

◇は読むことに困難さがある子ども向けの事業

---

[17] さわる絵本とは、視覚障害がある子どものため、絵の部分を貼り絵で立体化し、おはなしの本文を点字で表記して製作した絵本。

[18] ぬいぐるみお泊り会とは、子どものお気に入りのぬいぐるみを預かり、図書館に泊まったという設定でぬいぐるみが本を読んでいる様子などを写真に撮ってプレゼントする取り組み。子どもの読書促進に効果があると言われています。

[19] マルチメディアデイジー図書は、パソコンにより、音声と本文の文字・画像とを同期させて再生することができる電子図書。

[20] LLブックとは、写真、ピクトグラム、絵、読みやすい文章を使って読むことが難しい人に、読みやすく、わかりやすくつくられた本。LLブックのLLとは「LL」とは、スウェーデン語の「LättLäst」（日本語訳では「優しく読める」）の略。

施策2　本に親しみ、知るための基礎を形成する（小学生段階）

主に小学生段階を対象として、読む本の幅を段階的に広げながら、読み終えることでの達成感や興味・関心の広がりを感じられる読書機会をつくります。そして、子ども一人ひとりにとっての本の好みを見出すように促します。また、読書を楽しむなかで、本が「役に立つ」という実感を得られるよう、学校の授業や学習において、本や事典・図鑑等を活用する方法、さらには学校図書館という情報環境の活用方法を学ぶ機会をつくります。

■捉えるべきテーマ

〇本を読むことが好きな子どもを増やし、本を読むことが苦手だと感じる子どもを減らす。
〇読書の有用性（知識・情報の入手等）に対する気づきを促す。
〇学校図書館等を通じて、読むことに困難さがある子どものニーズの把握を図る。
〇読むことに困難さがある子ども向けに様々なメディアがあることの理解を促す。
〇読むことの各々の困難さに適合した読書手段や技術の活用を図る。

■取り組み

①様々な本に出会う機会の提供

子どもにとって身近な読書環境である学校図書館をはじめとして、区立図書館、さらには児童センター等の図書スペースを充実させます。それによって子どもたちが気軽に本を手に取ることができ、成長過程や興味・関心の展開に応じて様々な本に出会える機会をつくります。また、子どもたちにとっての第三の場所となるような居場所としての機能についても検討します[21]。

環境の充実とともに、子どもと読書環境を結びつけるための情報発信等にも取り組み、あらゆる子どもが読書環境にアクセスできるようにしていきます。さらに、読書興味を高めるような本を、子どもに応じて紹介できる人的体制についても検討していきます。

②本を通じたコミュニケーションの活性化

様々な場面において、子どもたちが本を通じてコミュニケーションを図ることで、読書への動機づけを高めるとともに、日常生活と本を関連づける機会とします。家庭においては、いっしょに本を読む時間をつくったり、同じタイトルの本を読んだりする「家読（うちどく）」の取り組みを促します。また、区立図書館や学校等においては、ビブリオバトル等の取り組みを行い、同じ世代の子ども同士、また異年齢の子ども同士のコミュニケーションを図っていきます[22]。

③本等や学校図書館を活用した調べ学習の促進

授業や長期休暇の課題として子どもたちが取り組む調べ学習を通じて、本や事典・図鑑等を使って知識・情報を調べる方法を知ることで、スキルを高めます。また、学校図書館において、図書館を活用する方法についても学ぶことで、情報環境を活用するための読書能力の基礎を育みます。

---

[21] 第三の場所とは、コミュニティにとって必要な家庭でも学校や職場でもない、つながりを得られる場所として重視されているものです。子どもにとっては家庭と学校とは別の空間を意図して用いています。

[22] ビブリオバトルとは、書評合戦とも呼ばれ、何人かが自分のおすすめの本の魅力を短い時間で紹介し、その紹介を聞いた聴衆が読みたくなった本（「チャンプ本」）を決めるゲーム形式の書評会です。

また、インターネットを調べごとに利用する基礎的な方法を学ぶことも読書能力の基礎づくりとして取り組みます。

④読むことの困難さに応じた読書手段と機会の提供

視覚障害、識字障害、学習障害等の障害や言語の壁等の困難さには、それぞれが必要とする読書手段や読書補助具は異なります。それら読書手段を、区立図書館が中心となり、ボランティア等とも連携しながら整備していきます。

さらに、それら読書手段が利用できることを、学校等を通じて、読むことに困難さがある子どもやその保護者に対して周知します。また、実際に体験する機会をつくり、本が読めるという実感を子どもやその保護者が得られるようにすることにも取り組みます。

また、身体障害や入院等により読書環境にアクセスしにくい子どもに対しては、訪問サービスや配本等で対応していきます。

【事　業　例】

○おはなし会
○手づくり会
○科学あそび教室
○一日図書館員
○図書館スタンプラリー
○図書館による新聞発行
○読書ノート
○ビブリオバトル開催
○夏休み調べ学習お助け隊
○英語資料等の収集
○読み聞かせ講座
○学級文庫
○読書マラソン[23]
○ペア読書[24]
○タブレットを使ったデータ提供
○調べ学習資料の最新版の提供
○地域資料・英語資料の充実
○「家読（うちどく）」の啓発
○児童コーナーの設置・充実
○SDGsや“SDG Book Club”の本の紹介[25]

◇デイジー図書／マルチメディアデイジー図書の更なる活用・周知の充実
◇点字図書、さわる絵本、大活字本を含む拡大図書、LLブック等、各種資料収集の整備・充実
◇来館できない児童への宅配サービスの強化
◇施設・病院へのアウトリーチサービスの充実
◇リーディングトラッカー活用の普及[26]
◇発達段階や障害の程度に応じての対面朗読の実施
◇マルチメディアデイジー図書を体験する機会の提供
◇都立特別支援学校や品川区立障害児者総合支援施設などとの連携
◇多言語イベントや手話付きおはなし会の充実
◇多言語のおはなし会
◇サピエ図書館の周知[27]

◇は読むことに困難さがある子ども向けの事業

---

23 読書マラソンとは、対象図書を指定し、その本を読んだ冊数を競うゲーム性のある読書活動です。

24 ペア読書とは、同じ本を2人で同時に読み、あらすじや感想を話し合う読書方法です。

25 “SDG Book Club”とは、国際連合が2030年までに達成しようと採択した「持続可能な開発目標（SDGs）」を学び、行動を促すために、毎月公開される6～12歳の子どもを対象としたブックリストです。

26 リーディングトラッカーとは、読書補助器のこと。スリットがあり、読みたい行を集中して読めるように、他の行の文字を隠して読み進めることができます。

27 サピエとは、目で文字を読むことが困難な方々がデイジーや点字図書等のデータを直接利用できる電子図書館機能を備えた全国情報ネットワーク。全国視覚障害者情報提供施設協会が運営。国会図書館ともシステム連携しています。

施策3　本等を自ら読もうとする姿勢と調べる力を育む（中学生段階）

主に中学生段階を対象として、様々な種類の本を数多く読む機会とともに、一冊の本を深く読み込む機会をつくることで、本への信頼感に根差した読書興味を形成します。さらに、特に学校の授業や学習において、情報環境を活用する基礎的な方法を学んだ上で、具体的な問題や課題を想定して複合的な情報環境を活用する体験を積み重ねていきます。

■捉えるべきテーマ

〇本を読むことが好きな子どもを増やし、本を読むことが苦手だと感じる子どもを減らす。
〇読書の有用性（知識・情報の入手等）に対する気づきを促す。
〇問題の発見・解決を学ぶなかで、様々なメディアを用いて調べるスキルを高める。
〇学校図書館等を通じて、読むことに困難さがある子どものニーズの把握を図る。
〇読むことに対する各々の困難さに適合した読書手段や技術の活用を図る。

■取り組み

①子どもの嗜好や流行に応じた蔵書の形成

中学生段階には、児童書、大人向けの本、さらにはマンガやライトノベルを楽しむ子どももいます。区立図書館においては、中学生世代にとっての「良書」と一人ひとりにとっての「適書」がバランスよく収蔵されたティーンズ向けの蔵書構成を検討します。また、ティーンズ向けのパスファインダーの作成や、専任の職員の育成・配置についても検討し、子どもたちと本を結ぶ手助けに取り組みます[28]。

さらに、中学生の図書館利用を促すような情報発信に取り組むほか、子どもにとって身近な場所に向けたアウトリーチ型の読書環境形成の取り組みを検討します。

②子ども同士のすすめ合いを通じた読書の推進

数多く本を読むことと、深い読書を両立させることを意図し、ビブリオバトル等の読書と子ども同士のコミュニケーションを組み合わせた機会をつくります。子どもたちが紹介するために深く読み、また紹介されることで本を手に取る動機づけとなることを配慮して取り組みを行います。

また、学校図書館や区立図書館において子どもたちが本を紹介するPOPや冊子をつくるなど、同世代の子どもたちが本を紹介し合うような取り組みについても検討していきます。また、子どもたちが日常的に利用するSNS等の活用についても検討します。

③複合的な情報環境を活用した調べ学習の深化

調べ学習では、インターネットも積極的に取り入れ、本や事典・図鑑等の紙媒体とインターネットを複合的に活用して知識・情報を調べ、自分の学習に活かすとともに、調べたことを言葉にして同級生等に伝えられるようになることを目指します。

中学生段階においては調べるプロセスを特に重視し、資料の選び方、知識・情報の調べ方、また

[28] パスファインダーとは、あるテーマや話題について資料や情報を探したいときの参考に、手始めとなる基本資料の一部や、調べ方を紹介した手引きです。

その正しさ等を確認・評価し、子どもたちへフィードバックするための方法を学校と区立図書館が連携して検討し、取り組んでいきます。

④読むことの困難さに応じた読書手段と機会の提供

小学生段階から引き続き、個々の困難さに合わせた読書手段を紹介し、提供することで、困難さがあっても読書を楽しめるように取り組んでいきます。

くわえて、中学生段階においては、小学生段階に比べて読書が苦手だという子どもや、嫌いになる子どもがやや増える時期です。そのような子どもに対しては、困難さを有していないかどうか把握するとともに、苦手意識や嫌いにならないよう、読書興味を持ち続けることができるような読書機会を提供するようにします。

【事　業　例】

○おはなし会
○グローバルおはなしルーム
○手づくり会
○科学あそび教室
○一日図書館員
○図書館スタンプラリー
○図書館による新聞発行
○読書ノート
○ビブリオバトル開催
○夏休み調べ学習お助け隊
○英語資料等の収集
○読み聞かせ講座
○学級文庫
○読書マラソン
○ペア読書
○タブレットを使ったデータ提供
○調べ学習資料の最新版の提供
○地域資料・英語資料の充実
○「家読（うちどく）」の啓発
○ティーンズコーナーの設置・充実
○ティーンズによる図書館との協働

◇デイジー図書／マルチメディアデイジー図書の更なる活用・周知の充実
◇点字図書、さわる絵本、大活字本を含む拡大図書、LLブック等、各種資料収集の整備・充実
◇来館できない生徒への宅配サービスの強化
◇施設・病院へのアウトリーチサービスの充実
◇リーディングトラッカー活用の普及
◇発達段階や障害の程度に応じての対面朗読の実施
◇マルチメディアデイジー図書を体験する機会の提供
◇都立特別支援学校や品川区立障害児者総合支援施設などとの連携
◇多言語イベントの充実
◇サピエ図書館の周知

◇は読むことに困難さがある子ども向けの事業

施策4　情報環境を活用し、社会にかかわる力を養う（高校生世代・大学生世代）

高校生世代・大学生世代を対象として、自分の将来や具体的な課題に対して、複合的な情報環境を活用して知識・情報を得ながら、自らの考えを形成していくための調べ学習に取り組みます。そして、その考えを同世代等と共有し、議論することで、解決の方向性や解決策を見出していくトレーニングの機会も提供します。

また、区立図書館や地域での活動に参画するよう促し、子どもの読書活動を促進していく担い手となるように取り組みます。

■捉えるべきテーマ

〇高校生世代においても、さらに読むことが苦手だと感じる子どもを減らす。
〇問題の発見・解決を学ぶなかで、様々なメディアの特性を理解し、選択できるスキルを養う。
〇社会参画に必要かつ十分な情報環境の活用能力を育む。
〇読むことの困難さをサポートする人や団体を知り、より活発な行動を促す。

■取り組み

①自立や社会参画につながる蔵書の形成

社会参画を控え、また実際に参画する時期であることを踏まえ、将来の生き方や職業選択につながる本を区立図書館のティーンズ向けの蔵書として充実させることで、自立や社会参画につながる本を手に取ることができる蔵書構成とします。そうすることで、中学生・高校生世代の興味・関心に応える図書館を目指します。

②読書活動の世代間での循環の促進

高校生世代・大学生世代における本を通じたコミュニケーションは、同世代同士にくわえ、自分たちよりも幼い子どもたちとのコミュニケーションであると考えます。具体的には、高校生世代・大学生世代が区立図書館等での子どもの読書活動にボランティアとしてかかわるように促すとともに、この世代ならではの視点で企画協力をする機会をつくるなど、読書活動が世代間で循環できるように取り組んでいきます。

③読書能力を確立する学びの機会

高等学校における調べ学習では「探求」がキーワードとなっており、高校生自らが課題を設定し、情報を収集し、整理・分析を経た上で、さらにそれらをもとに自分の意見を言葉にすることが求められています。調べることで自分の考えを持ち、それを共有することで共通の考えへと発展させることこそ、知識社会においては肝要であり、読書能力の最終段階として、スキルの確立を目指して取り組んでいきます。

その際には、情報メディアを知識・情報を得るための手段として効果的に利用するスキル、得られた知識・情報の正確性を検証しようとする態度、そして知識・情報を用いて社会にかわろうとする姿勢が総合的に育まれるよう、授業モデルや評価について学校と区立図書館が連携して検討し、取り

組んでいきます。

④読むことの困難さに自ら対応することに対する支援

在学中であれば学校を通じてアプローチし、読書への動機づけや支援を行う体制を整えます。卒業後においても、家庭や福祉施設等を通じてアプローチすることは可能ですが、自らが読書をしようと思い、また読書手段を獲得していくことも必要となります。そのような場合にも、地域において困難さをサポートする人や団体に出会うことができるよう情報発信に取り組むとともに、支援を行う人材・団体の育成に取り組みます。

【事　業　例】

○部活動との連携
○図書館委員との連携
○区内大学との連携
○各学校等保有の地域・学校資料の写真展示
○図書館スタンプラリー
○区立図書館による新聞発行
○読書ノート
○ビブリオバトル開催
○英語資料等の収集
○読書マラソン
○ペア読書
○タブレットを使ったデータ提供
○調べ学習資料の最新版の提供
○地域資料・英語資料の充実
○「家読（うちどく）」の啓発
○ティーンズコーナーの設置・充実
○作家の講演会
○ティーンズによる図書館との協働
○SNSを活用したPRの強化
○短編小説の創作発表の機会提供

◇デイジー図書／マルチメディアデイジー図書の更なる活用・周知の充実
◇点字図書、さわる絵本、大活字本を含む拡大図書、LLブック等、各種資料収集の整備・充実
◇来館できない生徒への宅配サービスの強化
◇施設・病院へのアウトリーチサービスの充実
◇リーディングトラッカー活用の普及
◇発達段階や障害の程度に応じての対面朗読の実施
◇マルチメディアデイジー図書を体験する機会の提供
◇サピエ図書館の周知
◇多言語イベント

◇は読むことに困難さがある子ども向けの事業